

報」から「与える広報」の時代への脱皮が求められると同時に、それぞれの各分野の不統一や重複を避けるよう要求する声が強い。それは予算の効率的使用や費用対効果の原則からも当然のことだが改めて「一本化」「総合調整化」の努力が望まれる。もっとも、このことはいわゆる官庁のセクショナリズムの現状からみて言うは易く行ない難く、種々の障害が予想されるが、大局的な見地からみてこの「一元化」の理想へ一歩一歩前進してゆかねばならない。

これまでも海外広報活動の窓口には外務省がなっているが、予算が各省にまたがる分野が多く特に総合的な努力が要請される海外広報面では必ずしも十分な調整が行われているとはいえない実情である。具体的に云えば同じような内容の宣伝用印刷物が各機関、団体ごとに発行されている半面、必要とされる宣伝用印刷物が欠けている面が往々にして見受けられる。この点「体制不在」ともいえる現状である。

決断と実行をモットーとし、日中正常化を果敢にやった田中内閣は「広報外交」の抜本的刷新のため早急に新しい体制の整備、総合調整の機能を早急に整える必要がある。

またわが国の海外広報の今後のあり方として、いま一つ重要な課題がある。これは、ともすれば政府の「公的広報」というべきものに偏しがちなこれまでの行き方を改め民間の自発的な努力を組織する方法を考えることである。

この点米国の場合は教育、文化、交換計画にしても、政府のみならず民間の幅広い自発的な協力にささえられている現状である。

政府は条約を結ぶことはできるし、政治家は会談することができる。しかしそれらの接触は「国民の相互理解」には限られた効果しかもたないものである。国民みづからも相互に交わらなければならない。いわゆる市民外交の必要性が叫ばれる所以である。この意味で民間の全面的な協力を背景としたすそ野の広い海外広報の努力こそが本筋である。いわゆる量から質への転換の時代に入った現在、総合外交の認識のもとに、官民一体の海外PRの積極的推進が今後の

時代の要請である。

私のまわりの「観光同人」たち

—私教版 観光事業回顧録—

平山清

昭和二十三年十月に全日本観光連盟（社団法人）に入った。あれから二十五年あまりになる。

二十五年という四半世紀、ほんとうは相当にながい星霜なんだろうが、私にはどうもそういう気がしないのである。

これがたとえば昭和十五年という今から三十四年前、私が中学校を卒業した年であるけれども、それから一年の浪人生活、山形高等学校で雪と月とさくらんぼにかこまれた二年余、つづいて戦争、学徒出陣とそのあとに来る終戦と、数年間の環境の変りようがあまりにもはげしかったから、昭和十五年などは今となって、たいへん遠い昔の話だという実感がする。

それにひきかえて、私が観光に足をふみこんだ昭和二十三年から今までというのは、一体なにをしていたんだろうとふり返ってみても、どうも変りばえがしない。入社したところと今の仕事と、表面的にはそう変ったことをしているとも思えない。情報官理部にいて、時に石川さんの仕事を手伝って宛名カードをしらべたり、切手を貼ったりしていると、二十五年前の私が、ふっと眼前に二重写しになってくる——それほど、二十五年間はいつの間にか過ぎ去ってしまった。

そう思っているうちに、あの埃だらけの、歩けば床がきしむ木造の交通公社本社二階奥にあった全日本観光連盟（全観連、ゼンカレン）と言っていた）の時代のことが懐しくなって、だんだん辿っ

てみる気になった。おもに、わたくしをめぐる「人」を中心に。

制限付き観光旅行の許可時代

私は「無責任時代」——昭和二三・四年

昭和二十三年の九月に大学をおさなりに卒業して、十月一日に就職したけれども、実はこの年の四月から全観連にきている。すき好んでとびこんで来て（というか、平山孝副会長の世話で置かせてもらって）、アルバイトではない半年間ただ働いたたのである。今思って学生の身分で身勝手もきままりというところだ。

でもみんないい人だった。

渋谷からの定期券だけは出して下さった。はじめて事務所にとびこんだ私に通勤定期の世話をした下さったのは、江原さんだった。忘れられない。江原さんはそういう人なのである。今日でも若い諸君で江原さんの世話になっていない人は少ないと思うが、JNTOが過去のわが国観光事業中央機関の性格を連綿として今に伝えているとするならば、それは庶務の牙城を三十年近く守りつづけている寡黙実行の人、江原さんの姿がまさに象徴的なのだ。

▽

手近かの仕事は「観光」という名の機関誌に伴う雑用であった。今日、日報協から出ている「観光」の前身かもしれないが、変型B5判二十四ページの月刊誌、その用紙割当てをもらうのにGHQ・CIE（連合国軍総司令部民間情報教育局）に二カ月に一度ぐらい申請を出すと同時に、作ったものは必ず納本しなければならぬという時代のことである。「観光」は被占領国の出版活動としてはGHQからは比較的好感を持って理解されていたのだろう、用紙はなんとかまわしてくれたが、向うから「アメリカのホテルの記事が入ったからぜひ載せてはどうか」などとCIEから原稿の押売りも来たのには閉口した。

奥付には「編輯兼発行人 鈴木寿」とあった。つまりこの機関誌は創刊（昭和二十一年秋）からずっと鈴木さんがほとんど一人で企

画し、原稿を依頼し、あるいは自分で書くなどしていた。CIEとの連絡もやっていたわけである。そこへ私が校正や発送を手伝うことになって、以後ながく鈴木寿さんの仕事の関係がつついた。

海軍で鍛えたスポーツマンの寿さんが温厚な人で、ビジネスマンのイロハをなにも知らない私にいろいろ教えてくれた。机を接した先輩として、叱られたのも寿さんからが一番多かったと思ってしまう。

とにかく、入り立ては、なんにも知らなかった。なんでも食いついてやろうと精を出すのはいいとしても、組織の中ではどういふ分担で仕事をするのか、なにが大事な内容なのか、といった感覚は甚だ不足していた。他の課長の言うことに耳を貸すのはまだいいとしても、命令系統である直接上司の指示をまづきかなければならないという、新入社員心得の第一歩がわかっていなかったようである。こういう私が、二十年の後、こんどは新入社員教育の担当を仰せつかうようになるのだから、省みてゾッとする思いだ。当時の不完全な私をとくも引っぱって下さったのは、鈴木さんばかりではない。その上司・業務部長の林謙さん（評論家、日本ナショナルトラスト理事）もそうだったし、まだ多くの方に感謝しなければならぬ。

話をもとへもどるが、薄っぺらな冊子とはいえ、当時月刊誌を出していたことは、賞められていいと思う。鈴木さんも一時は交通公社の「旅」と張り合う意気込みで、戸塚文子とはよく連絡していた。私は、「観光」を手伝う一方、全観連の業務を周知するための会報「全観連報」というのを手がけることになった。その年の八月頃からである。仕事の内容や関係先の動きを新聞記事的に主観を交えずに書くことを教えられた。

「全観連報」を以後数年つづけたので、後年も「会報」に縁が出来てしまっ、ながいこと総務部系統をあるくことになるのは、妙な縁である。

▽

その頃、全観連の仕事の目玉商品は「緑化運動」であった。「荒れた国土を平和な緑で」というスローガンを打出してキャンペーンもやった。

今でこそ環境問題が自然保護だと誰しもがわかったように言うけれども、私たちに、何だ今ごろという気がしてならない。この種の運動の本当のさきがけをしたのは私どもの団体であり、観光面の施策の一つとして木を植えることそれ自体までやっていたのだから、今かと思えば気宇広大というか、地道というか、悲願のような気持ちでやっていた仕事である。その仕事のかねにあってた人は高橋進さん（現、日本観光協会事務局長）と島田克三さんである。この二人は観光地整備開発の専門家である。

四月一日は「緑の日」といって全観連が中心になって植樹祭というのを日比谷公会堂で催した。島田さんは公会堂前で来観者に苗木を配り、わが国の緑化運動の第一線に立っていた。

緑化運動には毎年緑の美しい景色を入れたポスターを作った。昭和二十七年度のそれは中村研一画伯に六義園で書いてもらった。諸君、ごらん下さい。この原画がいま、J N T O に伝えられて役員会議室にかかっています。

△

緑化運動も一例であるけれども、全日本観光連盟が創立以来筋をとおしてやってきたのは、国民に対する「観光観念の普及」という分野である。私が手伝いはじめた四月頃、あたかも運輸省、交通公社、全観連の三者共催で観光標語を募集していて、毎日のように二三千枚の応募の葉書が到着した。総数五万二千余通のなかからつぎの三点が一等に当選した。

第一部（観光事業の重要性を強調するもの）

「観光も絹と並んだ輸出品」

第二部（観光資源の愛護を強調するもの）

「ボクノオウチモ ケシキノヒツツ」

第三部（観光国の国民としての心構えを強調するもの）

の再開は各方面から期待されていたが、この七月から制限付で復活した。即ち連合車最高司令官は日本交通公社をして一週二十四名を限り観光のため入司を許可し、戦後復興に要する外貨獲得の一助とする案を承認した。かえりみれば去る昭和十六年以来観光事業に関して我国は全く鎖国同様の状況におかれていたが、今ようやくその門戸を開くときが来たのであり（中略）或る種の制限下といえが我国復興並びに国際親善に待つ役割は決して見逃すことが出来ない。而して日本交通公社の右に基いて行行旅行日程は大略次の如くである。

第一日 羽田（横浜）到着 東京見物（東京泊）
第二日 日光往復（東京泊）
第三日 東京―鎌倉―箱根―熱海（熱海泊）
第四日 熱海―京都（京都泊）
第五日 京都見物（京都泊）
第六日 奈良往復 京都―東京（車中泊）
第七日 東京着 自由行動 帰国
全日本観光連盟及び日本交通公社はとりあえず連合車最高司令官宛感謝文を送った（後略）。
かくして、資料によれば昭和二十三年の来訪外客数は、観光客四六二一人（うち前記のパッケージツアー四六人）、商用客二四三七人、その他七三人、計六三二〇人となっている。

「ハワイ観光団」と「ニューヨークの日の丸」

国際観光覚醒時代―昭和二十五・六・七年

「全観連報」の編集も回を重ねるうち、内外観光事業の知識を入れるのに役立ったようである。

運輸省観光部へ資料を集めに行き、間島大治郎観光部長（元理事）をはじめ観光部の何人かの人に顔も知られるようになった。八幡得一郎、篠田元昌、海谷秀三らの面々とはこの頃からの知りあいであったようだ。（もっとも「知りあい」などという表現は今だ

「八千万観光日本の案内者」

私の役目は、山積みされたはがきを百枚づつ揃えて穴をあけ、ひもでくくる仕事であった。

△

私がいへん長く勤めているのかのように読者はお考えになるかもしれない。事実なにがしかそんな前提があったの懐古録なのだが、実はJ N T O の前身ともいえる全日本観光連盟という団体のなかでみると、男性では実は私がいちばん新人（あらいら）なのである。すてにお名前を出した人を含め年寄りも若い人もすべて先輩だ。私以後に全観連は男の職員を採用していない。

以後数年、全観連はその使命が重く、全国からの期待も大きかったにもかかわらず、予算は必ずしも伸びず、本部職員は増加しなかったのである。

この背景で、私としても一人述べておきたい人がある。山本阿久利さんである。

彼は私より一年はやく、昭和二十二年八月に入社した。十四才の少年だった。そしてオフィスでは掃除と雑巾がけと謄写版刷の主役を何年も引受けた。夜は高校へ通った。

職員みんなが彼を可愛がっていたのとうらはらに、山本君にとっては孤独な青春を何年かすごした。一年たてば先輩が入ってくる、というのではなかった。いつまでも自分が一番下積みという時代は、このあとかなり長年間にわたるのである。

山本君が悪戦苦闘していた頃、私はノホホンとしていた。ひるさがり、時々仕事の合間に机上に突伏して情眼をむさぼっていた。おでこに赤い丸を残すこともあった。

そんなことをしていて、よく首にならなかったものだ―「試雇」という制度がまだ無かったから幸いだった―。

△

「全観連報」昭和二十三年七月十五日付より抄出

「戦前日本が海外受取勘定の主要源泉の一つであった観光事業

から使えるので、その頃、八幡さんにはじめて会って用件を伝えるまでは、ビクビクして大変な神経を使った」

△

昭和二十六年四月某日、私はひと時、A・P・L汽船のレジデント・ウィルソン号に乗っていた。

外人観光客の来訪は昭和二十五年春頃から在外邦人（おもにハワイから）の母国訪問観光団という形でにわか活況を呈しはじめていた。これを迎え、あつ旋していた日本交通公社外国部の外人旅行課長は松村信雄さん（現、監事、J A L 顧問）である。雑誌「観光」の編集打合せの末、「ハワイ観光団の日本旅行の模様を記事にしよう、J T B にたのんでみるから桑原君、きみ添乗してこいよ」ということになって、（桑原とへうのは私の名字である。それが後に昭和二十九年平山清となった）外人旅行課のほうでは手不足のこと、二つ返事でOKになり、「マウイ真言宗観光団」というのに私が添乗することになった。もちろんアシスタント、その時竟た言葉だが「バグマス」（バグッジマスター、即ち補助の添乗員は荷物番にしか過ぎないという意）というやつだった。

団長（マウイ島の僧侶）以下三十五名位の一行はP・ウィルソン号（二万二千トン）で到着予定だ。横浜の中央堤に接岸するのは午前十時半頃だが、実は、添乗員は入国審査官や銀行の人と同様に東京湾の入口までランチで出迎えに行くのである。港外乗船といいて、八時にはウィルソン号に乗り移った。木の葉のようにゆれるランチから本船に移るとき危うく足を踏みはずして、船のスタッフにかえらる一幕があった。（何しろ私は泳げないんですから）眼前一メートル先にはドス黒いものだけしか見えなかった。

別府から来たチーフコンダクターの指示のもと一行の確認、入国手続のための協力、荷物の集結、上陸後の指示とかいひんなことがあった。前もって本社でだいたひ話をきいたがイザ本番となると、私の説明では（日本語でよいのだけれども）なかなか皆さんには心もとなかったようだ。

その時、私は最上甲板のマルコポーロ・ラウンジに居て一行の世話をした。ダブルの背広に腕章をつけて我に返ったとき、ウィルソン号の巨体がゆっくりと横浜港に向って動いていることをたしかめた。

豪華船のなかには幾通りものキャビンや小綺麗なサロン、その間を下へ下へとつづく螺旋階段が入組み、下船直近で狭い廊下にはスリッパを無数に並べられていた。そして行き交う観光客の中から香水とチューインガムとストッキングを一緒に買ったようなアメリカの香りがしてくる。色とりどりのレイをかけた日系老人や二世の独特の言葉と表情、なにもかもが私にはオドロキであった。国際観光の姿をまのあたりに見た感激だったのかもしれない。

一行は東京をふり出しに、別府まで二十一日間の旅行であったが、私は京都まで添乗した。

日光では御用邸を改造した日光パレスホテルに泊った。今から思えば恐ろしく風変わりなホテルだったが、ハワイの一世は勿体ない所へ靴のまま上らせてもらってと、涙を流した。京都の宿になったホテルラコヨーも今はない。

私の添乗は取材記者がホンネだったから、交通公社にとっていくらか役に立ったのかどうかあやしい。外客あつた旋業務の体験として、ほんの垣間見であつたけれども、私には大きな「開眼」だった。添乗員としてバスの中で人数をかぞえるときに、人差指を眼前に差出して「一・二・三・四」とやっていたいけないう、じつとただ眼で追うだけで数えなさい、と教わられた。

あとで誰かが言った「この時だけは英語がでないキミでも動まっていたんだよ」。

その頃、日本交通公社のもう一つの一角では、海外観光宣伝活動が華々しく復活していた。

「国際観光事業の助成に關する法律」によって、昭和二十五年から海外宣伝のために日本交通公社に対し、また外客受入体制の整備

のために全日本観光連盟に対して政府補助金が交付されるようになった。日本交通公社は国策としてのこの事業を進めるために、昭和二十六年四月海外宣伝部を独立させ、英文パンフレットを皮切りに活発な事業を開始した。その指揮官は同社の横田慶理事（元JNTO監事）と木村重雄海外宣伝部長（前理事、現京王プラザホテル常務取締役）、いずれも戦前に鉄道省国際観光局や国際観光協会に対して米宣伝に腕をふるったつわものであった。

海外宣伝部の誕生とその発展は、名実ともに前途洋々とした明るさをもっていた。これが今日のJNTOの事実上の創成とみてもよいであろう。その母体が日本交通公社という、当時ではわが国唯一のナショナル・トラベル・エージェンシーとして、国策観光の実務推進に経験豊かな人材を揃えていたことも、海外宣伝部が以後充実した仕事を残すのにたいへん有効であった、と思われる。しかも交通公社では、海外宣伝の実施につき各界有識者の協力を仰ぐべく、会長（語問機関として国際観光宣伝委員会を設けた。これは現JNTOの運営審議会に相当するものである）。

当時全観連に居た私が、海外宣伝部のことを述べるのは筋が合いであろうし、十分知っている筈もない。しかし、宣伝ポスターや映画を作っているというだけでも、なにかうらやましい気がしていた。

なかに、美術学校出身のたいへん野心満々な青年デザイナーが居た。ポスター・コンクール審査の下見会場で「曾称」といいます」と自己紹介してくれた。

彼は堂本印象や中庭煥華、東山魁夷ら画伯の執筆を得てJAPANNのポスターをデザインし、幽玄な日本画の美を観光日本の紹介の第一弾とした男である。連綿と今日、否今後ともつづく独特の日本画・カレンダールも、材料不足の戦後から、曾称氏が悪戦苦闘したからこそ、基礎がきづかれたものだろう。まさに、「青年よ、大志をいだけ」。

海外宣伝部に対する政府補助金は昭和二十五年年度三〇〇〇万円、

二十六年年度三三〇〇万円、二十七年年度四九〇〇万円、今から思えばほんとうに小規模な事業費であった。そのなかで昭和二十七年七月二十一日、ニューヨークに日本観光宣伝事務所を設立した。講和条約の翌年、岩田一市所長（現、帝国ホテル取締役）と安居院平八所員の二人は、大きな日の丸の旗を持ってロックフェラーセンターに乗り込み、十余年にわたる観光宣伝のギャップをうめるため、きら星のごときアメリカ旅行業界に敢然と立ち向った。「予算はまことに粗末」と木村部長は関係者に説いてまわったが、その中から広告費に二万ドルを割いたことは、対米宣伝百年の計を考えた涙ぐましい努力であった。

このころ海外宣伝部に居た方がたのうち、曾称さんのほかにいまJNTOに在職なのは生駒さん、海藤さん、金子さん、松本さんの四人である。

若き日々をパンフレットの保管と配布に捧げた海藤さんのことも私の記憶に新たである。いまのように事務室も広くなかったし倉庫も不十分だったから、壁面いっぱい天井にとどく整理棚が作られ、海藤さんは毎日、一日たりとも脚立と出庫伝票に縁のない日はなかった。

「先生」こと松本さんは、そのころも先生だった。全観連に居た若僧の私が、必要があつて和英翻訳を海外宣伝部にたのみに行くと「『先生』がいでしょ」と指さされた相手は、ジャパン・トラベル・ニュースの原稿を機関銃のような音をたててタイプ打ちしている。おそろおそろ「アノウ、」と言っていたが、先生はタイプを止めもしない。ふり向きもしない。こちらが困って、もじもじしていると「ヨシ分ッた。モウ帰ッていヨ」全々こちらを見ずに引受けてくれた。何しろ、こちらは意志を伝えるだけで精いっぱいだった。それが、ものの一時間もしたら絵野沢さん（英文タイピスト、いまの小野口さんの前々任者）が笑いながら「できました」といって英訳を持って来てくれた。

国際観光面の仕事を回想しつつ、海外宣伝部が中心となっていたが、当時やっていた今はJNTOの守備範囲ではなくなっていることを、若干書いておこう。

全観連は外客受入体制整備を行なう団体として政府補助金をもらっていた。（昭和二十七年年度は二〇〇〇万円）それは昭和三十年六月、財団法人国際観光協会に引継がれることになるが、これでどんなことをしたかというと、

一、「外客をあたたかく迎えましょう」という、国民に対する観光普及のパンフレット

二、国際観光の現状や外客誘致の必要性を説き、観光施設を紹介した国民大衆向け展示会

三、観光地に外客向け公衆便所や英文観光案内板を設けるため、都道府県への補助

四、緑化運動、国土美化運動（くず籠の設置など）

全観連では「海外観光宣伝と外客受入体制整備は車の両輪」と唱えて、事業の必要性を説いた。

当時の政府補助金の性格とか、事業の内容がどこまでが「国際観光」なのかの認定の問題などは、ここではとも述べられない。ともあれ一方では全国の観光関係機関を会員とした連合体という性格で、会員の声を政府へ伝える役目も果たし、他方、外客受入体制整備も行なうという、仕事の苦心が必要であった。そしてこの推進者は平山副会長と、専務理事武部英治氏（昭和二十七年より衆議院議員一期、昨年十二月逝去）であった。

翼に日の丸の日本航空が羽ばたいたのも、このころであった。しかし念願の国際線進出はまだ先のことであった――

新機構への序章

昭和二十八年九月、私は結婚へ

運輸省観光部は、昭和二十五年、国際観光のための補助金制度を

確立する一方、通訳案内業法、国際観光ホテル整備法、旅行あつ、旋業法など重要な法律を實現し、講和後の独立日本の観光行政は時代の脚光を浴びていた。

昭和二十六年十月九日からアテネで開催されたI.U.O.T.O.（官設観光機関国際同盟）総会には間島観光部長が出席、ここでアメリカの提案により、わが国（運輸省観光部）は正会員として加盟が認められた。同時に、アジア東旅行委員会（A.F.E.T.C.）の設立も議せられ、日本は一躍、世界観光界の檣舞台に出、ミスター・マジマの名が、ながくI.U.O.T.O.のメンバーリストに載ることになる。

昭和二十八年の訪日外客は八万〇一四三人、対前年比十一%の増加、昭和二十四年の一万五三〇〇〇人にくらべて五倍に伸びた。そしてその外客消費額は三五四〇万ドルと推定される、と運輸省は発表された。

この推定消費額というのは、訪日外客の種類別に一日単価を立てて積みあげたもので、運輸省方式といわれる推定である。いま旅行外貨受取額として使っているIMF方式とはちがっていた。

これについて、全観連の会議で運輸省観光部の国井富士利事務官（J.N.T.O.総務部調査役を経て日本ホテル協会事務局長、故人）は、こう発言している。

「運輸省で作っている統計は、推定額が少なすぎるとの批判を観衆審議会からも受けている。恐らくは七千万ドルに達しているのではないかと思う。しかし日銀では一千万ドルぐらいしか見ていない。運輸省としては今後再検討し、できるだけ正確なものをだしてゆきたい」

私は、統計の話をとくに持ち出したわけではない。亡くなられた方のことを述べても本誌の読者にはあまり興味がなからうと思いつつも、昭和二十年代の観光界を思うにつけて、どうしても触れずにすまれないのが、国井さんの存在である。いつまでも童顔をたたえていた国井さんは間島行政時代の貴重な

プレーンであった。旅行あつ旋業法の制定とその解説を例にひくまでもなく、彼の文言（もんごん）は一言半句のすきもない公文書であるかと思えば、質疑応答の席では豊富な事例をつぎつぎに乱発して活字自在に汲めども尽きぬ論議を展開した。そしてどんな困難な命題を与えても、国井さんは必ず答を出す人であった。

雑誌「観光」と並んで観光事業研究会から「国際観光」が発刊された（復刊第一号昭和二十三年六月、運輸省観光課の発行）私は「国際観光」に毎号のように執筆された国井さんとは、どんな頭のいい人のだろうかと、はじめ思っていたし、偉い人にみえた。「観光」の編集にも欠かせない人材であったし、昭和二十七年、八年頃から私自身も種々話を聞くチャンスができた。

日本のホテルが高い、中級ホテルが必要だとは誰しもが言うことだ。それでは、中級ホテルとは何か、それはどうすれば採算に合うのできるのか、そのためには国がどこまで具体的な施策をとればよいのか、これを行政の立場で本気で研究していた人は、それは国井さん一人しかいない（多少言いすぎかもしれないが）と私は思っている。中級ホテル建設と運営の試案を執筆しつつ、国井さんは昭和四十二年急逝された。

どんなに頑張っても、私には国井先輩の十分の一ほどの仕事もできないだろう。

運輸省観光部が、国井さんのほかに、すでに観光事業研究会の中核的存在として昼も夜もめざましい活動していた北田勝助氏をはじめ、佐藤智三郎、酒井常太郎（元調査部、T.I.C.羽田派出所長、故人）、西川修、別所重治郎といった猛者を擁し、間島部長のもとにガッチリとスクラムを組んで、わが国観光界に力みを見せていたのは、二十六、七年から三十二年頃であらうか。ある時は立法政策面に敏腕だとみせれば、ある面に対しては果敢実行力に富み、一時は春風胎動として対抗馬をしりぞけてツーリズムを推進したこれに国会対策にかけては無類の斎藤光正（現、プリンスホテルス

クール副校長）が縦横に活動した。しかし押しの一手も暴走してはならない。そこに八幡得一郎、篠田元昌といった調整役諸氏も巧妙に配置されていたのである。

その間、昭和二十九年二月から三十二年八月までは福永正美氏も業務課長として光彩を加えている。

この一糸乱れぬ陣容は、まさに大型空母「間島」を中心とした強力な機動部隊の姿であった。

機動部隊の最大の戦果は昭和三十年六月の財団法人国際観光協会の設立であらう。さらに同じ八月、観光部が観光局に昇格することにより一段と輝きを増すかにみえたのである。

全日本観光連盟というのは、全国のあらゆる観光機関団体を会員とし、その連合体という組織からしても、ある種の団体の事務所は全観連のなかに同居する、場合によってはその仕事も全観連の職員が兼務するという形があっても不思議ではなかった。日本温泉協会や国際観光土産品協会がそうであった。平山副会長が社長になった株式会社国際観光協会も、設立準備時代同居していたときもあった。とくに日本温泉協会は全観連が母体となって戦後の再発足をした。全国の温泉旅館を会員とした連絡組織とする一方、東大の物産内科の先生方も積極的に協力して温泉の学術的利用についても発言することがあった。同協会の事務局をあつかっていた全観連の先輩が二人までも故人となられたのは残念だけれども、鈴木賢一君と、それから全観連の和文タイピストだった稲垣幾代さんがいま、温泉協会で大活躍である。おかげで雑誌「温泉」も連綿とつづいて、昨年十二月月号は第四十一巻をかざえている。

昭和二十九年四月十二日、私は結婚して、いまの名字になった。大正十二年、四十六才のときに私をまんだ母は、この年喜寿を迎えていた。「清がおめでたいことになって」と、心から喜び、渋谷松壽の家を訪れた和子を丁寧に丁重にもてなした。学士会館の結婚式は簡

素なお茶の会であったが、母の喜こんだ姿が忘れられない。

しかし、戦後の白山の平山家にどんな苦勞があったのか、私の母はほとんど知らずに、二年後に亡くなった。

その昭和二十九年の秋、八重洲口に国際観光協会館が落成、全日本観光連盟はせまい木造J.T.B.ビルから一躍、広々とした近代的环境に移り住んだ。しかし、その時はまだ、次年度の国庫補助の行方と予算規模のことはわかっていなかったのである。

「銀明水」と「観光教室」

国際観光協会発足のころ

昭和三十一年三十二年

財団法人国際観光協会 Japan Tourist Association の時代は昭和三十年六月から始まる。横田巖さんが常務理事として役員室に加わり、公文書は全部横書きになった。今まで海外宣伝部で拝顔していた大林正二さん（J.A.T.A.事務局長）が内閣部次長として、私の上役になった。同時に生駒さん、海藤さんなどの縁がはじまっている。ニューヨークから帰任した安居院さんは外閣部次長になった。

全観連は政府補助金が打切られた結果、規模を縮小することになったが、事務所はひきつづき同じところにあった。というよりも、J.T.B.海外宣伝部が全観連の隣りに乗り込んできて、国察観光協会の看板を出し、全観連から江原さん、島田さんや私など数名が新協会に身を移した、というほうが当たっている。

全観連としては、財政は大幅にきりつめても、体面的には従来と同じ仕事をしたいという念願もあったし、そのため国協の役員や一部の人は発足後しばらく兼務の形であった。出口一重内閣部長（現、京急興業顧問）は両団体の接点であり、大林次長や私は出口部長を中心に、全観連にひきつづき居る鈴木寿さんと同じ机の「島」を形成するという具合で、外部からたずねてきた人はどこからどこ

までが全観連なのか、容易にはわからないようであった。

国際観光協会でも「会報」を出しはじめた。その体裁は例の松本先生担当の英文紙「ジャパン・トラベル・ニュース」と同じようなもので、A4判四ページ特アール紙使用、写真多数掲載という豪華版で、最初の数回は題名まで「Bun-ei」になっていた。いまの振興会の「会報」はこの流れを継いでいるから、題字のヘッドが赤色であるわけだ。

△ PATA第五回総会は昭和三十一年二月十三日から一週間、帝国ホテルで開かれ、一九六名の代表が参加し、冬の日本に満足して帰った。

『ホノルルやマニラの代表はオーバーを新調し、冬の寒さにあがれて来たらしい。ナンフランシスコのPATA事務局からは、アスピリンをたくさん用意せよと言ってきたのに驚いた日本ホスト・コミティでは、帝国ホテルの暖房を調べるやら、なるべく外出しないで済む日程を組むやら苦心したが、これは杞憂であった。おもしろいことに会議中かなり大きい地震があつて参加者を面くらわせ、会後の旅行では雪が京都を白一色にした。代表は、「日本接伴委員会がこんな完璧なプログラムを準備してくれて感謝にたえない」と帽子をとった」と記録に残っている。

△ この夏、島田さんは富士山へ出張した。調査ではない。ワシントン・造船協会では、アメリカ大統領杯争奪ボートレースが二十五周年に当るので、記念行事として世界各国から「珍しい水」をとりよせて、ボトマック河に放水するという計画を立て、日本にもニューヨーク事務所協力を依頼してきた。これを受けた木村重雄新事務所長は考えたま、富士山頂にある水、それも二十五周年（銀）に当るのだから「銀明水」を寄贈しようとして、横田常務に申請してきた。

それで島田氏が八月二十五日、富士登山となったそうである。

富士浅間神社奥宮の神官からお祓いを受け国際親善の祈りを込めた銀明水を持帰った。御神酒壺にうやうやしく納められた銀明水は横田常務から日航のステューワーズに手渡され、カメラのフラッシュが光った。そのあと九月十五日、アイク大統領の手でボトマック河岸に放水されたという話である。

△ どうやら木村所長はこのチャンスに、横田さんに富士登山をさせたかったらしいが、残念ながらそれは実現しなかった。

△ このころの内国部の仕事のハイライトは、鉄道省国際観光協会の先輩、観光事業研究会会長の井上萬寿蔵さんの執筆を得て「観光教室」という単行本（新書版）を明日新聞社から出版したことであろう。著者名は明示されているが、著作権は国際観光協会が買取るという形で公刊されたこの本は、市販の図書の少い観光界にとって、オアシスのごとき存在であった。ものやわらかく、流麗な文学調で、国際観光の意義も資源の保護も訴えられている。

私は井上先生に教を求めつつ、資料さがしや数字の訂正、交止と索引の作成をお手伝いし、甲斐のある、痛しくてたまらない仕事であった。「観光教室」は、その後数年、学生観光研究連盟の若い人たちが多く読まれたが、残念なのは、この名著が再版されなかったことだ。

△ 昭和三十一年のはじめ、松本先生のアシスタントとして、すばらしく英語のうまい青年が入ってきた。渡辺幸雄と名乗った。彼自身も前に先生をやっていた。しかし、「先生」のそばに居ては、足許にも及ばなかった。先生は渡辺君のコレボンを徹底的に訂正した。

△ 嘱託の一年間をすごし、彼は三十二年職員となり、協力宣伝を担当した。「協力宣伝」という、部外者にはなんの宣伝のことだかさっぱりわからないような業務上の術語がようやく定着しつつあった頃である。

彼は、ハタと困った。外人を連れて歩くのに何の不都合も感じな

い彼であったが、まだ見たこともない列車の時刻表というもののにとまどった。求めたいような列車の時刻はどこに載っているのか、それはつぎにどのページへつながつているのか、運賃をどうやってしらべるのか。彼は時刻表を持って私のところへ来た。

私と彼の親友関係はこうしてはじまった。

△ 英語の先生として、JNTOプロバの先鋒として、体のたいへん軟らかなスポーツマンとして、話題に事欠かない明るい表情と困り切った沈鬱な表情と両方を使い分ける珍しい人物として、とにかく彼はだんだんに名物男に成長する――

△ VIPの来訪が予定変更して手配済みがオシヤカになった時、彼は夜八時すぎ、受話器を片手に、見えぬ話相手に何度も頭を下げて苦心さんたんした。

△ 昭和三十一年度の末にトロントとホノルルに観光宣伝事務所が店開きし、事務所は四所対米宣伝は次第に息づいていった。

△ 三十一年度の映画「真珠誕生」(ア・パール・イズ・ボーン)や三十一年度の「日本の旅館」(リョカン・ア・ジャパニーズ・スタイル・イン)は、苦心製作のかがあつて以後ながく好評を増し、戦後の海外観光宣伝に記録されるべきフィルムとなる。

△ 三十二年四月には、旅行作家として国際の名声のあるシドニー・クラーク氏が来訪している。この結果出版された「オール・ザ・ベスト・イン・ジャパン」が世界旅行界にどれほど大きな役割を果たしたか測りしれないであろう。

そして私たちの職場では――

△ いよいよセツちゃんこと小笠原節子さんの登場によってオフィスに新風が吹き込まれ、私の「観光同人」の歴史も近世へと大きく展開するのである。

〔完〕

お許しねがいたいこと

△ 二十五年前から、私にとってお世話になった方や、印象深い人その時代の重要な方々は、もちろんまだまだ多いのですが、本誌を読む方々のことを考えて、すでに以前に亡くなられた方や、すでに退職して観光関係から遠ざかった方々は、できるだけ省略いたしました。

△ 筆の加減で敬称を入れたり呼びすてにしたりしていますが、ならん意図はございません。

私の美術史

オーヴェールのゴッホ

福 永 正 美

△ ゴッホが南仏のサン・レミールからパリに戻り、四泊した後、オーヴェール・シュール・オワーズに着いたのは、一八九〇年(明治二十三年)の五月二十一日である。もう八〇年以上も前のことである。パリで弟テオと二年ぶりに再会し、その奥さんや生れて間もない甥を初めて見、またオーヴェールのガシェ医師の手当を期待して、彼は、着いたその日に弟夫妻に宛てて書いた手紙の中で、生き生きとして、オーヴェールの美しさを書いている。「オーヴェールは実に美しい。とりわけ美しいのは、近頃次第に少なくなって来ている古い草屋根が沢山あることだ。此処に腰を落着けて、こいつを描いた絵で、滞在の費用が出ぬものか、そうあって欲しいものだ。実際、非常に美しさだ。特徴ある絵画的な本物の田舎だよ。」(第六三五信)

しかし彼のこの生活は、わずか二月余りで非劇的な終末を迎え